尼崎市100周年新聞
発行所
尼崎市
〒660-8501
尼崎市東七松町
1-23-1
電話
06-6489-6662
（市制100周年
記念事業担当）

Happy100th anniversary Amagasaki

合併を経て現尼崎市へ

時には「武庫川市構想」も

尼崎市は平成28年で市制100周年を迎える。この一世紀の間には、尼崎市では様々な動きがあった。尼崎市が市域拡大を繰り返してきたこと、それに伴って市章が変わってきたこと、または構想段階で終わり実現しなかった市町村合併があったことなど、尼崎市の成り立ちについて触れる。

最初の尼崎庁舎（旧尼崎城郭内）

現在の尼崎市に至るまで数々の市町村合併を経て、時には武庫川市構想が出たりしながら、尼崎市は100年の歴史を歩んできている。まずは尼崎市がどのように出来てきたのかを紹介する。

尼崎市が誕生したのは、1916（大正5）年、当時の尼崎町と立花村の一部（東難波、西難波）が合併し、尼崎市制が施行された。世帯数は6496戸、人口は3万2013人。大正5年、つまり、第1次世界大戦の最中の誕生である。なお、市制施行の順番としては、兵庫県下では神戸市、姫路市に次いで3番目、全国では66番目となる（当時の市町村数は1万2000を超えていた）。

次に1936年（昭和11）年に、小田村と合併する。後述のとおり尼崎市は数々の合併をしているが、この小田村との合併のみが対等合併で、これは小田村が当時の尼崎市と匹敵する人口を擁していたことや、道路・水路の整備などの都市問題の解決が小田村単独では困難であったことなどから合併に至っている。最初の市制施行時にも、小田村南部に合併の申し入れを行ったが実現されていないという経緯もある。

その後、1942（同17）年に大庄村、立花村、武庫村と合併、1947（同22）年に園田村と合併し、現在とほぼ同様の市域となっている。

合併後は、尼崎市は臨海部の埋め立てが段階的に進み、現在の総面積は50・72平方㌔（東西8・3㌔、南北11・5㌔）となっている。

小田村との合併調印

今は無き合併構想

尼崎市は市町村合併を経て、今に至っているが、その中には、実現しなかったものの具体的な合併検討の段階まで進んだケースがある。

一つは「武庫川市」。これは1939（昭和14）年に浮上したもので、大庄村と武庫村、そして武庫川の対岸であった鳴尾村と瓦木村の4村で合併し、武庫川市を誕生させようというもの。大庄・鳴尾の工場地帯と瓦木・武庫の風致・住宅地帯との組み合わせで発展性のある10万都市の誕生が期待されたが、当時の国・県が阪神間に小都市の新設を認めなかったため日の目を見なかった。

続いては「阪神市構想」。これは当時の広域行政の流れを受けて、1958（同33）年に発足した、尼崎市と伊丹市、川西市、猪名川町による三市一町連絡協議会によって検討された。当時から南北交通を充実させる意見があり、阪急伊丹線の川西市への延伸などが議論されたが、活発に進んでいくことはなかった。

実はこの前の1952（同27）年に「阪神都市」の動きがあり、前述の「阪神市」はこの阪神都市のミニ版のようなもの。「阪神都市」とは、尼崎、西宮、伊丹の3都市を中心にした総合大都市建設案。この当時、市民アンケートも行っており、その結果は、賛成が40・5％、反対は4・8％、どちらでもよいが34・8％と、かなり多くの人が前向きであったことがうかがえる。

尼崎市章は2代目

現在、さまざまな場所で表記されている尼崎市章。これは100年の歴史があるものではなく、80年前に作成された。つまり尼崎市章としては2代目になる。その根元は小田村との合併にある。

尼崎市章は、工都を象徴する「工」と尼崎の「ア」と「マ」の字を図案化したもの。これが最初の尼崎市章であり、その後、小田村と合併したことにより、小田の「小」を組み合わせて現在の尼崎市章が出来上がっている。小田村との合併が対等合併であったことの表れでもある。

なお、最初の尼崎市章だが、尼崎藩の槍印の形がモデルとなっている。ちなみに尼崎藩の藩域が現在の神戸市須磨区あたりまであったことはあまり知られていない。

10月8日は記念日

尼崎市が誕生したのは、1916（大正5）年4月1日。つまり、市制施行の月日で考えた場合、基準は4月1日となる。しかしこれとは別に、尼崎市では市制が実施されたことを記念する日として「市制記念日」が定められている。

この市制記念日は、小田村との合併の諸手続きが一段落した10月8日に、市村合併奉告祭及び祝賀式・祝賀会が催され、これを市制実施記念日（現・市制記念日）として定めた。これまでにも毎年10月8日は市制記念日として引き継がれており、市制100周年もこれまでと同様、10月8日の市制記念日を軸としている。

この市制記念日、以前は市役所や学校はお休みの日であったが時代の流れで通常の日と同じ扱いになっている。

ちなみに、最初に尼崎市が誕生したときは、4月9日が「市制実施紀念日」とされていた。

市民まつりも

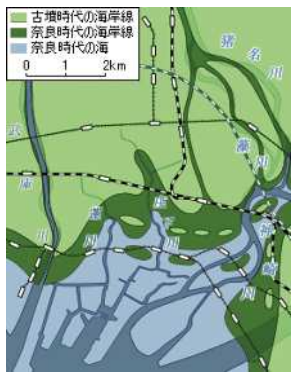
毎年恒例の市民まつり。実はこれも市制記念日が関係している。尼崎市民まつり協議会規約に「市制の誕生を祝う」「10月8日を中心に実施」とあり、このことから市民まつりは、市制誕生を祝う祭りであり、毎年10月に開催されている。

尼崎市章
初代　2代目

由来　「尼崎」は海から

地名の由来としては、漁民を意味する「アマ」と、先端を意味する「サキ」を結合したものではないかといわれている。

尼崎は縄文時代には、現在の阪急沿線ぐらいまでしか土地はなく、それより南は海であった。その後、大阪港の沿岸潮流や武庫川、猪名川が運ぶ土砂が堆積し、尼崎平野が形成されている。そのため、アマ（「海士」、海で生計をたてる人々、漁民・海民）が居住するサキ（「崎」、海に突き出た場所）という地理的な特徴によるものと推察されており、これは中世の文献に「あまがさき」が「海土崎」「海人崎」などと表記されていることなどからもうかがえる。また、尼崎の地名には「浜」や「長洲」「潮江」など海をイメージする言葉が多いことからも尼崎の土地の形成を読み取ることができる。



歴史の音符♪

尼崎市に関する歌は多く、都はるみの「ド根性節」（昭和40年）、三田明の「田能遺跡音頭」（同45年）、デュークエイセスの「ああ尼崎市民家族の歌」（同61年）、槇原敬之の「尼崎の夜空を見上げて」（平成18年）など。その中でも最も尼崎市にふさわしい歌の一つとして挙げられるのが「尼崎市歌」である。

この尼崎市歌のきっかけは1925（大正14）年、「国に国歌あり、学校に校歌あり、会社に社歌あり、市に市歌なかるべからず」ということで、市歌を作ることになる。市歌を広く歌っていただくために、歌詞を応募し、翌年に完成したのが次の尼崎市歌である。

尼崎市歌

一、名もなつかしき琴の浦　海人（あま）のいざり火影消えて
今こそ来寄れ新潮の　高きかほりによみがえる　市民の意気を
君見ずや

二、日に栄えゆく尼崎　昔の手ぶりたづねつつ　新しき道歩むなる　市民の誇りここにあり
我が市の恵み個々にあり

これが尼崎市歌の誕生であるが、1936（昭和11）年に小田村と合併することで新尼崎市となり、当時、「躍進工業都市にふさわしく市歌を制定する要あり」として、新たな市歌制定の動きが現れる。そして、始めは一般公募する予定であったが、権威者に委嘱するのも一つとして、土井晩翠氏（荒城の月など作詞）が作詞することに。作曲は東京音楽学校のもと、1940（同15）年に新しい尼崎市歌が完成する。

一、大阪湾を前にして　六甲山下　阪神の　空に名高き　景勝地　昭和うれしき　御代の春
市画（しかく）広まる　尼崎

二、大陸かけて　国運の　伸ぶるまさしく　天の時　時に応じて
商工の　業（わざ）の躍進　めざましく　新たなるもの　尼崎
万歳　万歳　尼崎

この2番は、国粋色が強いということで省略されていたこともあるなど、いずれの歌も当時の尼崎市の様子をうかがい知ることができる。

多くの人でにぎわう商店街（1972年）

高人口は約6倍増加　最55.4万　17万人減少の時も

尼崎市は数々の合併を経て、1947（昭和22）年以降は市域に大きな変化は無いが、人の数では全国でも例が無いほどの激しい変化を経ている。

尼崎市が誕生した時の人口は約3万2000人。しかし、この尼崎市は小田や大庄、立花、武庫、園田地区のほとんどが含まれておらず、現在の尼崎市より小さく、人口を正確に比較することは困難。そこで1920（大正9）年の国勢調査を見ると、現在の市域の人口は約7万8000人であったことが分かる。同年の日本の人口は約5千600万人であるため、約1000年間で日本の人口は2倍強になったのに対して、尼崎市は6倍程度も増加していることが分かる。

著しい人口増減

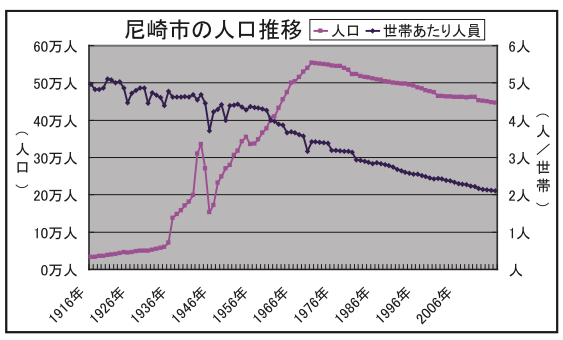
もっとも、尼崎市は単純に人口増加を続けたのではなく、100年の間には大きな増減がある。

大きな人口減とは人口が半減する時期があったこと。これは尼崎市が合併や軍需工業の発展などより人口が増加していた中、第2次世界大戦終戦を迎える時に、空襲や疎開などで、約33万人から約17万人と大幅な人口減となっている。

その後も重工業の発展などにより、人口は増え続ける。例えば1965（昭和40）年の国勢調査では、人口増加数（昭和35年比）は約9万5000人増と政令指定都市を除き全国1位の増加数。政令指定都市を入れても6位で、その増加数は顕著である。

この時、人口は50万人を超え、政令指定都市の基準要件も満たしており、ピーク時の1971（同46）年には約55万4000人を記録し、当時は現在の政令指定都市の広島市や仙台市をも上回る人口数であった（尼崎市の最高の全国都市人口順位は1953年の10位。なお、この年の人口推計では、20年後には105万9000人になるという今ではありえない数値を算出していることからも当時の急激な人口増の状況を推察できる）。

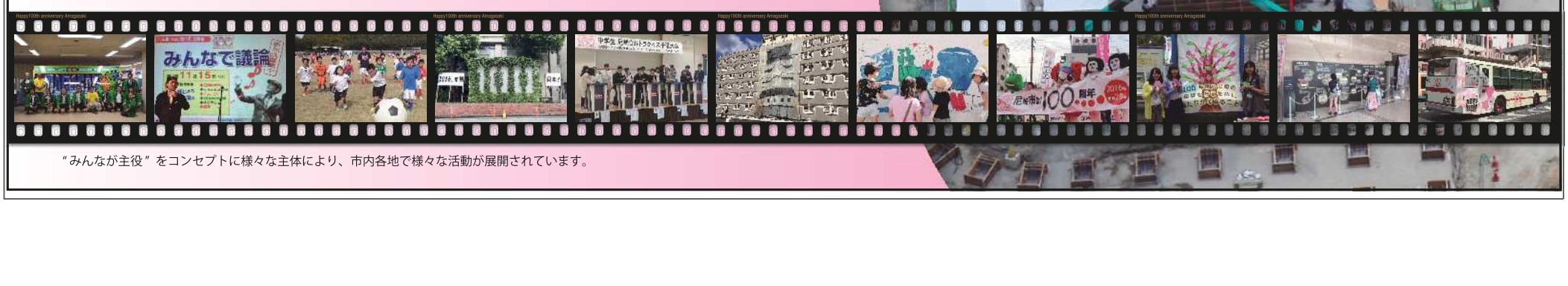
しかし、その後の工場転出や閉鎖などにより、除々に人口は減り続けており、現在では約45万4000人（平成22年国勢調査）とピーク時から10万人以上の人口減となっている。また人口増の場合と同様に、この人口減（1971年比）も政令指定都市を除き全国1位の減少数（政令指定都市を入れても2位）となっている。



お知らせ

この「尼崎市100周年新聞」は市民の方々の取材により作成された市民新聞です。
また、朝日新聞阪神支局、読売新聞阪神支局、産経新聞社、神戸新聞社、日本経済新聞社神戸支社の協力を得て作成しています。

平成28年10月8日（土）は、
尼崎市の「100周年記念日」です。


“みんなが主役”をコンセプトに様々な主体により、市内各地で様々な活動が展開されています。